



【役員名簿(2018年4月現在)】(五十音順)

代表	結城 正美 (金沢大学)
副代表	小谷 一明 (新潟県立大学)
顧問	上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
	西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長	辻 和彦 (近畿大学)
事務局補佐	
	浜本 隆三 (甲南大学)
	日野原 慶 (大東文化大学)
会計	大野 美砂 (東京海洋大学)
	河野 千絵 (日本大学・非)
監事	村上 清敏 (金沢大学名誉教授)
ニュースレター編集委員	
	佐々木 郁子 (龍谷大学)
	澤田 由紀子 (甲南大学・非)
	豊里 真弓 (札幌大学)
会誌編集委員	
	相原 優子 (武蔵野美術大学)
	塩塚 秀一郎 (京都大学)
	芳賀 浩一 (城西国際大学)
	平塚 博子 (日本大学)
	Bruce Allen (清泉女子大学)
コンピューターセンター	
	岩政 伸治 (白百合女子大学)
	北国 伸隆 (長崎外国語大学)
	山城 新 (琉球大学)
評議員	
	浅井 千晶 (千里金蘭大学)
	池田 志郎 (熊本大学)
	太田 雅孝 (大東文化大学)
	上岡 克己 (高知大学名誉教授)
	茅野 佳子 (日本大学・非)
	黒崎 真由美 (関東学院大学)
	塩田 弘 (広島修道大学)
	管 啓次郎 (明治大学)
	高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
	高橋 龍夫 (専修大学)
	高橋 勤 (九州大学)
	高橋 昌子
	巽 孝之 (慶応義塾大学)
	中川 僚子 (聖心女子大学)
	波戸岡 景太 (明治大学)
	林 直生 (滋賀大学)
	巴山 岳人 (和歌山大学・非)
	横田 由理 (大東文化大学・非)
	吉田 美津 (松山大学)
院生代表	笠間 悠貴 (明治大学・院)
広報	喜納 育江 (琉球大学)
	塚田 幸光 (関西学院大学)
	松永 京子 (神戸市外国語大学)
研究助成	
	岡島 成行 (青森山田学園)
	管 啓次郎 (明治大学)
	乳井 昌史 (早稲田大学)
	野田 研一 (立教大学名誉教授)
	山里 勝己 (名桜大学)
	結城 正美 (代表)

石牟礼文学の渚

代表 結城 正美 (金沢大学)

2013年11月に水俣の旧宅が解体された折に発見された石牟礼道子氏の未発表原稿が、石牟礼道子資料保存会により整理され、漸次発表されている。10代や20代に書かれたものが多い。『評伝 石牟礼道子——渚に立つひと』(新潮社、2017年)で著者・米本浩二氏が記しているとおおり、この時期の石牟礼氏の文章には虚無感がにじみでている。その要因としては当然、10代に経験した戦争の影響が考えられるだろうが、初期の作品を読むと、戦争よりも、この作家の「赤子の時から孤独だったという思い」が、終生消えることのなかった虚無感の根底にあるのではないかと、思えてくる。

結婚直後に執筆に取りかかったとみられる「不知火をとめ」は、主人公「草村道子」に仮託して自身を描いた中篇小説で、「嫁入り準備期間の取り戻し的な別居」として実家に戻っている「道子」のやるせなさが吐露されている。夫「信之」への愛情とも同情ともつかぬ態度、生の確証が得られないことによる孤独と絶望、その裏返しともいえる自己燃焼への強い欲求。それらの間を揺れる情動が、「道子」の境遇を熟知り顔に語る易者への挑発的で挑戦的な態度に縁取られて鋭角的に描かれ、やり場のない感情が文面から噴き出している。

同じく結婚した20歳頃に書かれた「新妻の訴へ事」には、より直截に、生の確証の希求と、惰性的な生の営みに対する嫌悪が綴られている。著者名に結婚前の吉田姓を使用するあたりは、結婚という制度への憎悪をむき出しにした反骨精神のあらわれだろう。反制度、反骨精神という点で、若き石牟礼氏の言葉には、意外にもアメリカのヘンリー・D・ソローを連想させるところがある。「新妻の訴へ事」で、「人生を眞向から考へやうとしてゆく生きかた」に執着する石牟礼氏に、『ウォールデン』でソローが語った言葉——「僕が森へ行ったのは、思慮深く生き、人生で最も大事なことだけに向き合い、人生が僕に教えようとするものを僕が学びとれるかどうか、また死に臨んだときに、自分が本当に生きたと言えるのかどうかを、確かめるためだった」——が重なる。石牟礼氏がソローを読んだかどうかはわからないし、両者を比較する研究も管見の限りみあたらない

が、妥協ぬき惰性ぬきで人生と向き合う点で両作家は通底しているのではないか。初期作品を読みながらそう思った。

『苦海浄土』にみられるように、天草弁をベースとした「道子弁」で再現される海辺の暮らしは、人と自然の未分化な世界である。しかし、書き手である石牟礼氏自身は、強烈な「個」の意識を有し、生の意味を探究し続けた。無論、それは容易に把握できるものではなく、それゆえ虚無感にも苛まれた。個の意識、生の確証の希求は、結婚後に新たな生命を宿した身となっても、あるいはそうなったからこそ、さらに赤裸々に語られる。

私は敢えてそなたを「我がいとしい子よ」とは、呼ぶまい。私自身を母とは呼ぶまい。今ひとりのひとを、わが夫、そなたの父、とは呼ばない。

それのみに生きた私の尤も誇らしい、乙女らしく美しい、人間として私の見付け得た純スキさをいさゝかも汚したくないといふ私の良心をそなたもよろこんでおくれ。(吉田道子「新妻の訴へ事」『アルテリ』三号 [2017年]、18)

その後生まれた一人息子の道生氏は、幾度となく自殺を試みた石牟礼氏を生側の側につなぎとめる存在となる。

石牟礼道子という作家は、自他問わず「主婦」という言葉で表されることが少なくなく、農家の嫁に課された家事や畑仕事の間隙時間に短歌や小説を書く石牟礼像が、いつしか私のなかで出来上がっていた。しかし、そのような印象は、初期作品を読んで瓦解した。主婦という立場に、家庭のささやかな幸福に何の意味も見出さない深い断念が刻まれているのを知ったからである。

家庭というひびきは彼女をひきつける何物でもなかった。この広い天地のどこへ行ったら一体、わたしの安らかな吐息のつける所があるのかと、このことを誰に問うたらいいのかと悩ましく自問しながら、道子は眸をあげた。その空虚な視野には、天草の島が永遠の沈黙を彼女に示したに過ぎなかった。(「不知火をとめ」『不知火をとめ』藤原書店、2014年、29)

やりどころのない虚無感は、空疎なポーズなどではなく、実際この時期に3度目の自殺未遂がなされたという事実と併せて読まれるべきものであろう。そして、この徹底した虚無感、生の確証を求める強い欲望と

裏表の関係にある。

(刺戟がほしい刺戟が……クワッと取りのぼせて前後をわきまえなくなるような、現実のさ中から、すっかり宙に浮き上がって、メラメラ燃え上げるほどの、そんな感情の燃焼法はないものか、メラメラと燃え狂って一息に灰になって仕舞えばいい……。)(「不知火をとめ」26)

一方の極に虚無感、絶望、断念が、もう一方の極に脱自的な生の燃焼の渴求があり、石牟礼氏の言葉が両極のあいだを荒々しく揺れる。このような激しさは、『苦海浄土』以降のよく知られる作品群にはほとんどみられないのではないだろうか。

前述の評伝を著した米本氏は、「石牟礼道子は渚に立つ人である」と言う。「前近代と近代、この世とあの世、自然と反自然、といった具合に、あらゆる相反するもののはざまに佇んでいる。[……]境界が定かならぬ渚ではなくて、海か陸かどちらかに安住できたらどんなに楽だったろう。石牟礼さんの書いたもの、とくに一〇代二〇代の手記を読むたびに、「才能」は「苦しむこと」の同義語なのかと思う」(米本 14)。

『苦海浄土』や『椿の海の記』をはじめとする石牟礼文学の世界は、不知火海の「ひかり風」のように荘厳で穏やかにみえるが、渚では波が荒々しくぶつかりあっていたことを初期作品は示唆している。

石牟礼文学において渚は特別な意味をもつ。

浜辺に立ちますと、目に見えるものもありますが、目に見えないものたちの気配もいっぱいみちみちています。それらが混ざり合って浜辺は「生命たちの揺籃」というか、生まれたものもありますが、未だ生まれぬ「未生のものたちの世界」でもあるように思います。[……]そしてそういう気配の中に自分が、その真ん中ではないですが、そのどこかに気配の一つとなって呼吸している自分もいる。そういう気配たちとの魂の交歓のような中で育ったというか、育ててもらったような気がします。(「地上的な一切の、極相の中で」米本 273-274より引用)

石牟礼文学を読んできた者にはなじみ深い、美しい描写である。しかし、穏やかな風に目を奪われると、つい石牟礼文学を理想化しがちになる。若き石牟礼氏が立っていた、生命を落としかねないほどの荒々しい渚にも目を向け、この稀有な書き手の文学を読み解かねばならない。

【大会案内】

2018年度ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会

(2018年9月1日[土]～2日[日])

和歌山大学南紀熊野サテライト (和歌山県田辺市新庄町3353-9 Big・U内)

大会実行委員 今村 隆男 (和歌山大学)

今年度の全国大会は、紀伊半島にあります和歌山大学南紀熊野サテライト(ビッグU内)で9月1日(土)・2日(日)に開かれます。

初日は、恒例の午前中の院生企画から始まりますが、今年のテーマは「鯨」です。捕鯨で有名な紀伊半島最南端の太地にまで足を運び、「鯨」の問題を多角的に考えるという興味深い企画になっています(このほか、発表やシンポジウムの詳細は同封の資料をご覧ください)。そのあと、6人の研究者により、動物をはじめとして多彩なテーマをめぐって個人発表が行われる予定です。

今年は、シンポジウムを二つ開催します。まず一つ目は、初日の最後に予定されている「石牟礼道子追悼シンポジウム」です。近代社会の矛盾を問い続けた石牟礼道子の作品は、本学会でもしばしば取り上げられて来ました。本シンポジウムは、会長の結城氏の司会のもと、追悼イベントとして、70年余にわたる彼女の執筆活動を三つの時期に区分し、それぞれの時期における作品を論じることで石牟礼文学の全体像を再考しようという企画です。シンポジウム終了後は白浜の温泉地の中心に移動し、懇親会を開きます。

二日目の午前中は、総会のあと、田辺市の南方熊楠邸の隣にある研究施設「南方熊楠顕彰館」(<http://www.minakata.org>)から3人の学術員の方をお招きし、「《エコロジスト・南方熊楠》再考」と題して二日目のシンポジウムを行います。国内で初めて「エコロジー」という言葉を使った熊楠は、自ら「エコロジスト」として神社合祀反対運動を通して環境保護活動を実践しようとしたことはよく知られています。今回のシンポジウムでは、近年の研究成果を踏まえて熊楠の「エコロジー」はどこまで有効性を持つものだったのかを検証します。

午前の部の終了後、バスでフィールド・トリップに出発します。シンポジウムで取り上げられた熊楠の足跡を確認すべく、神島(かしま)や田中神社など、時間の許す範囲内で何箇所かを見て回る予定です。熊楠が「昨今各国競うて研究発表する植物棲態学ecologyを、熊野で見るべき非常に好模範島」であると紹介した神島は、古くから神島神社の社叢として守られてきた島で、伐採樹が売却されようとした際に熊楠が保全活動を始め、その結果1935年に国の天然記念物に指定されました。そのため、現在は原則として立ち入り禁止になっています。田中神社もまた、八上神社(王子)

に合祀された際、熊楠の助言によって貴重な神社林が守られた古社の一つです。これらの訪問先にご関心のある方は、ぜひ大会までに関連文献などを見ておいて下さい。上記の顕彰館のHPにも資料が掲載されています。フィールド・トリップは午後6時ごろまでには終了する予定で、南紀白浜空港18:35発のJAL便、JR白浜駅18:19発のくろしお34号に間に合うようにします。

フィールド・トリップに関しては特にお知らせがございます。神島への渡船には人数制限があり、30人足らずに限定させて頂く必要があります。そのため、誠に恐縮ですが、フィールド・トリップへの参加は事前予約制(先着順)にさせて頂きます。ご希望の方は、学会ホームページにリンクされているウェブフォームの「大会申込書」を通して、早めにお申し込みください(詳細はウェブフォームをご確認ください)。なお、島への船は天候によっては出航できない場合があります。その場合は、残念ですが訪問先を変更せざるを得ませんので、ご了承をお願いします。

会場であるビッグUへのアクセスは、大阪方面から

- ・特急くろしおで新大阪から白浜駅(2時間30分)
- ・関西空港からは日根野で乗り換えて白浜駅(2時間余)

・白浜駅からビッグUまでタクシーで5分
東京方面から

- ・羽田空港から、JALの直行便で南紀白浜空港(60分)、空港からタクシーで20分となります。

はるばるお越し頂く価値はあるかと思しますので、是非ご参加ください。

それから、今回の大会で特に留意頂きたいのは宿泊先の確保です。ご承知の通り白浜は関西では人気の観光地であり、大会は夏休み最後の週末に行われます。また、家族や団体用の旅館も多く、お一人で宿泊できる施設はある程度限られています。是非、お早めのご予約をお勧めします。

それでは、大会でお目にかかれるのを楽しみにしております。初日午前中の院生企画に参加できるように前日からお越し頂きますと、ゆっくり白浜温泉が楽しめます。

【石牟礼道子氏追悼エッセイ 1】

「みっちゃん」の声

野田 研一（立教大学名誉教授）

石牟礼道子さんに最初にお目にかかったのは、1996年8月にハワイで開催された「日米環境文学シンポジウム」の折りです。トヨタ自動車の支援を受けて開催されたASLE-JapanとASLE-US共催の国際会議。ハワイに赴くに当たって、関西空港で石牟礼さんと待ち合わせました。空港内の待ち合わせの場所に行くと、背中を向けて立っている小柄なご婦人がおられたので、「石牟礼さんですか」と声をかけました。するとこちらをゆっくりと振り向き、「はい、石牟礼です」とお答えになりました。

その瞬間、奇異なことが起こりました。「あッ、みっちゃんがいる」と思ったのです。石牟礼さんの微笑のなかに、私はまぎれもない「みっちゃん」の顔を見つけたのです。「みっちゃん」とは自伝的作品『椿の海の記』の主人公、4歳前後の多感な幼女です。私はその発見にいささかうろたえてしまいました。しかし、このとき以降、私には奇妙な習性が身につけてしまいました。大人の顔の中に子どもの顔を見る習性です。同時に、石牟礼文学はつねにどこかに「みっちゃん」を宿して成立しているのではないかという思い入れが付け加わりました。

ハワイまでの機内では隣席に座って、いろいろな話を問わず語りうかがうことができました。私にとって至福の時間でした。ただし、関西空港での待ち合わせの時点から、石牟礼さんには特別な気がかりがおありでした。水俣病患者である緒方正人さんたちが「日月丸」という「壊れ船」で水俣を発ち、東京湾をめざすというイベントが進行中で、石牟礼さんは時間を見ては電話をかけ、いまだどこにいるのか、船は大丈夫かなどその様子を絶えず心配しておられました。

二度目にお目にかかったのは、『フォリオa』という雑誌で「ジャパニーズ・ネイチャーライティング」を特集し、石牟礼さんにインタビューするという話が持ち上がったときです。九州大学の高橋勤さんとの共同作業でした。このインタビューは『フォリオa』第5号（1999年）に掲載された後、『石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ』（2000年）に収録されましたが、もっとも衝撃的だったのは、石牟礼さんが「言葉からまず壊れた。これが近代化の一番の芯だと思います」と語られたことでした。

具体的には、戦前は軍隊言葉、戦後は組合言葉が〈近代〉的なものとして入ってきて、それがハイカラなも

のとして、垢抜けたものとして、あるいは新鮮なものと受けとめられ、地域社会に浸透してゆく。石牟礼さんの目から見ると、この言葉の変質こそが〈近代〉の核心であると話されたのです。この話には、社会の変化はかならずしも可視的・物理的変化として現れるのではないという認識がうかがえます。また、政治的な右（軍隊）と左（組合）の両方が、〈近代〉的なものとして批判の対象として含まれていることにも注意するべきでしょう。（「学問」の言語も例外ではないでしょう。）

石牟礼さんは単純なイデオロギーの人ではありませんでした。イデオロギーで物事を語るにはあまりに深い視座の人でしたし、まったく別の世界を覗いていたと言ったほうが妥当かも知れません。じつのところ、水俣病に関わる支援者たちとの密かな葛藤もありました。それは路線対立などではありません。人間と世界の了解の仕方の根底的な差異だと言うほかありません。たとえば、緒方さんの日月丸が「東京で魂を降ろす」儀礼をしようとしたときなどにそのような差異が露見したことは、前述の対談にその一端が語られています。

石牟礼道子さんは「深い絶望の人」ではあるが、けっして「ニヒリズムの人」ではない、と最近某紙に書きました。それは、〈魂〉という言葉の理解の仕方に端的に表れています。石牟礼さんが絶望するのは、〈魂〉の不在という状況に向かってであって、逆に〈魂〉の存在を信じてやまないという点でけっしてニヒリストではないと思うのです。問題は石牟礼さんのいう〈魂〉とは何かです。遺された大きな課題のひとつです。

石牟礼さんに最後にお目にかかったのは昨年夏でした。手術を前にした時期でお辛そうなのに、時間を割いて下さいました。その昔、石牟礼論を書きますと言いながらずと書けずにいたこと、最近やっと短いものが書けたこと、そして若手研究者による優れた石牟礼論が出てきていることなどをかなり一方的にお話ししました。横になったまま瞑目して聴いておりましたが、最近の石牟礼論の話になると、いきなり「どうい内容ですか？」という質問をされました。ご説明をすると、「そうです。そのとおりです。私が書きたかったのは、おもかさまとの関係です」と明言されました。一転、驚くほど力強い声でした。それはまぎれもなく「みっちゃん」の声だと私には感じられました。

【石牟礼道子氏追悼エッセイ 2】

Remembering Ishimure Michiko

Bruce Allen (清泉女子大学)

With sadness, we realize that Ishimure Michiko passed away in February, after a long life filled with tremendous generosity, imagination, and inspiration. Her work and imagination have been deeply entwined with that of many of us in ASLE-Japan. Here I would like to offer a brief remembrance of her life and writing, and their interconnections with so many of us.

My first encounter with Ishimure-san came when I heard her speak at the ASLE Symposium on Japanese and American Environmental Literature held in Hawaii in 1996; an event co-hosted by the ASLE organizations of Japan and the US. This symposium took place at an important time when the concept of environmental literature was still in its birthing stages. The event, and especially Ishimure-san's talk, I believe, helped to shape the spiritual and artistic identity of ASLE-Japan.

I vividly remember Ishimure-san's talk—its beautiful sounds and sweeping narrative—as she verbally danced from story to story drawn from her vast life experience, and then how she brought all the diverse strands together with a message of hope. “Aura” is a word I normally hesitate to use, and yet I, and many other ASLE members, felt a sense of aura as she spoke about various themes ranging from the sad events of Minamata, to the joys of her childhood memories of animals, places, and people, to her passionate descriptions of the beauties of the natural world.

That meeting with Ishimure-san in Hawaii in 1996 helped us in ASLE-Japan to present the face of “contemporary Japanese environmental literature” to the world outside Japan. At the same time, it also sparked the beginnings of my own vocation as



(著者と石牟礼道子氏、2007年頃)

a literary translator. At the close of the meeting, we in ASLE-J agreed that there was a need to translate a representative work of Japanese environmental literature into English, in order to make her writing available to an international readership. The work we chose was *Lake of Heaven*, 『天湖』; Ishimure's recent novel from which she had read selections at the symposium. I was encouraged to take a role as a translator—despite my feelings of being woefully unqualified for the task. From that starting point I have gone on to collaborate with many others in ASLE-J in translating and interpreting Ishimure's writing, and in trying to support her vision of hope. For this I am deeply grateful to both Ishimure-san and to ASLE-J.

Ishimure Michiko's writing and imagination encompass such a wide scope that it is impossible to adequately summarize them in this short space, but let me mention just a few words and ideas that come to mind when I think of her life and writing: 気配, *kehai*—the signs of nature that are always all around us, but which we so often overlook; 言霊, *kotodama*—the life-sustaining spirit of the words in

which we live; 夢, *yume*—the world of dreams—not only the dreams we see alone at night but the “waking dreams” we share with others in our community; 和解, *wakai*—reconciliation—the going beyond antagonistic relations between victims and oppressors to the building of mutually supportive relations; 鎮魂, *chinkon*—requiem—our responsibility to remember and respect the souls of those who have passed on before us, often in suffering. There are many words I could mention, but let me end this short list with “花あかり,” *hana akari*—flower lights—the beautiful metaphor Ishimure has used to express her vision of a light and energy that might lead us to create a new vision of society and nature as we pass through difficult times of darkness and

destruction.

Ishimure Michiko often described herself as “just a housewife.” When I once asked her about her thoughts regarding the power of her literature, or any literature, to change the world she replied, “文学の力はとても些細なことです; “The power of literature is very small.” And yet, she suggested, when we truly see these countless flowers and share their light, it can spark a realistic hope and a power to change the world.

It is my hope that we in ASLE-J may continue to see and to share the energy from these tiny lights—the 花あかり, *hana akari*—that Ishimure Michiko has shown us, and that this, in turn, may help us to change the world for the better.

【ASLE-J-Grad Journal】〔エッセイ〕

邂逅の場としての展覧会「長万部写真道場 再考」

笠間 悠貴 (明治大学理工学研究科総合芸術系博士後期課程)

雪深い風土、先住民族アイヌとその風習、牛や馬と働く開拓農民、木造の漁船と漁師、サーカスの象や旅芸人、元気に遊ぶ子どもたち。北海道長万部町で戦後復興期を生き延びた人々の姿が、気取らない様子で写っている。2018年2月11日から25日まで長万部町学習文化センターで開催された「長万部写真道場 再考」展には、リアリズム写真運動に影響を受け1950年代に活動したアマチュア写真家集団「長万部写真道場」が残したモノクロ写真57点と、コンタクトシートなどの資料が展示されていた。地元の美術家、中村絵美が、「道場」の活動に興味を寄せ、当時のプリントを整理、保存し、充実したキャプションと共に構成したものである。最終日にはフォーラムも開催され、写真の研究者で明治大学教授をつとめる倉石信乃、青森県立美術館学芸主幹の高橋しげみの両氏が基調講演をおこなった。

リアリズム写真運動は、土門拳らを中心としてアマチュア写真家を巻き込んだ運動であり、戦後社会のゆ

がみや貧困にスポットを当て、その内部に入り込み現実を見つめようとするものであった。土門の言う「カメラとモチーフの直結」とは、相手の無意識に到達するまで、撮影者と被写体が徹底的に対峙することを指す。そしてそこには、自己と対象が合一するというロマンチズムが含まれている。「道場」の写真家たちは、土門の提唱に共感した多くのアマチュア写真家と志を同じくしていたという。けれども、「長万部写真道場 再考」展に展示された写真の一つ一つを見れば、被写体との対峙というようなものは感じない。写真家の力量によって相手を深掘りするというよりむしろ、被写体との信頼関係こそが前景化していた。それはまさに、長万部という土地でかつて起きた出来事の顕れであり、タイムカプセルを60年振りに開けたような感動だった。時を隔てた地元での展示は、リアリズム写真運動の主意をすり抜けてなお、写真の幸福な受容を開示していた。

【シリーズエッセイ 風景のカタチ (4)】

静かな森の小さな枝に

岡崎 朝美 (北星学園大学・非常勤講師)

数年前の晩夏のある晴れた日に、ドイツの森を歩いた。いっしょに歩いてくださったのは、ヴィルヘルム・シュテルプ氏 (Stölb, Wilhelm)。『森の美学』(Waldästhetik, 2005) の著者である。

私がシュテルプ氏へ出した手紙がきっかけとなり、シュティフター (Stifter, Adalbert) という19世紀オーストリアの作家の森林描写についてメールで意見交換をしてきた。当時、私は文学研究科の院生だった。林学を修めたシュテルプ氏の著書『森の美学』にも、シュティフターは、森を文学作品に表現した作家として挙げられている。

滞在していたオーストリア・リンツから、私がドイツ・ランツフト (Landshut) 駅まで行くと、シュテルプ氏は車で迎えにきてくださっていた。この日、お会いするのは初めてで、私はどこか緊張していた。オーストリアに比較的近い、南ドイツ、バイエルン地方のランツフト。駅から車で5分くらい、歩いて15分くらいの場所、緑の丘陵地帯が見渡せる場所にシュテルプ氏のご家族とお住まいだった。

到着後、テーブルが置かれた奥の庭に案内された。テーブルにつくと、奥様が緑茶に砂糖がいるかどうか、私に問いかけてくださる。そこから、日本の緑茶の話になり、不思議なほどに盛り上がった。私の緊張はすっとはぐれた。話題は、最終的に、シュティフター文学における森の描写の詳細さに及んだ。その後、庭のグリーンが晩夏の陽光に輝くなかを大学生のお嬢さんと植物を見ながら歩いた。そこに、「森のお酒よ」と奥様から掛け声。え? と思い、テーブルに戻ると、黒スグリ酒が用意されている。小さなグラスで、全員で乾杯した。

午後から、予定していた森歩きを開始した。シュテルプ氏は、「いつもの散歩だよ」と愛犬のショルシーに話しかけた。出発前に、奥様に、私の靴のチェックをしてもらった。森歩きに適した靴かどうか…。靴裏も含めて、「この靴なら、森歩きができる」と言ってくくださった。

二人と一匹で森へ。森に着くまでに、バイエルン地方の広がった風景に馴染んだ家屋が所々にあり、牛舎もあった。家屋の窓には赤いゼラニウムの花々が飾られている。脇道に生えたホップの実や、広場に聳え立つドイツトウヒの五月柱を見ながら、歩いた。犬のショルシーは道をよく知っていて、先導してくれる。

森に入ると、やや暗く、静かだった。森に着くまでの道もずっと静かだったけれど、静けさがより増した印象だ。小道があり、分け入るような道もある。小川には水がいっぱいだ。私が行く数日前に雨が降ったらしい。靴のチェックが必要だった意味がわかった。

湿り気や植物が足元を少々不安定にさせる。それでも、日本から用意してきた靴は森の地面にうまく対応し、私は、すいすいと森のなかを歩いていた。

それなのに、突然、私は一歩も動けなくなった。私の上着には、薄いショールが付属のように縫い付けられていて、その裾に野生のブラックベリーの枝が引っ掛かったのだ。枝の力は強い。無理に歩けば、裾は破れる。私が後ろ向きになり、とげとげしい枝を取ろうとしていたら、シュテルプ氏が気づいて、ゆっくりと取ってくくださった。

その静かな数分の間に、私の頭のなかを駆け巡ったのは、シュティフターの作品『みかげ石』(Granit, 1848) だった。森のブラックベリーの藪のなかに病で倒れていた女の子を発見した男の子が、旬のラズベリーや水などを運んで、倒れていた子の命を救う場面がある。ラズベリーとブラックベリーは、その実を付ける時季が微妙に異なる。森の植生をよく知る作家シュティフターは、「ベリー類」でまとめたり、「ブラックベリー」だけで統一したりせず、実の食べ頃による季節の差異や枝の状態まで作品に描出している。

私は、この時、シュティフター作品における森の灌木の力を実感した。晩夏という一語で一括りにできない森の時間、森の季節というものが一枝のなかにも宿っているように思われた。

シュテルプ氏の書『森の美学』には、「森を五感で捉えることが、まさに森の美学だ」という文がある。その文の意味が自分に迫ってきたのも、私の服が、勢いのある時季を迎えたブラックベリーの枝に不意に引っ掛かって、一歩も動けなくなった、この瞬間だった。

先日、シュテルプ氏からのメールに、「犬のショルシーは、もう11歳。年をとったけど、彼は今日も元気に森に行く」とあった。私は「今、ショルシーは森に行き、土の匂いを嗅いでいる頃かな?」と想像し、ショルシーの軽やかな足取りを思い出した。



事務局より

■2018年度ASLE-Japan/文学・環境学会
第1回役員会・総会のご報告

2018年6月2日(土)大東文化大学「大東文化会館」(〒175-0083 東京都板橋区徳丸2-4-21)において第1回役員会が開かれました。まず審議事項として、2017年度会計報告および監査報告、2018年度予算案が提案され審議の結果、承認されました。また一部役員改選案、全国大会案が審議を経て了承され、2020年ISLE-EA(日本にて開催予定)の開催時期と場所については引き続き検討していくこととなりました。ニューズレターの発行、会誌21号の進捗状況、現会員数、院生組織の活動、2018年ISLE-EA(台湾にて開催)についての報告がありました。役員会の後、例会が行われました。「場所と言葉、場所の言葉-小説家・木村友祐さんと翻訳者・Doug Slaymakerさんの対話を中心に」というテーマで行われ、活発な議論がありました。

■2018年度 ASLE-Japan / 文学・環境学会
全国大会のご案内

と き：2018年9月1日(土)～2日(日)

と ころ：和歌山大学南紀熊野サテライト

(〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9 Big・U内
Tel：0739-23-3977)

大会実行委員：今村隆男(和歌山大学)

ご出席いただける方は、7月末までにホームページからリンク先の「大会申込書」ページにてお申し込みください。会員の皆様の多数のご出席をお待ちしております。

<会費納入のお願い>

2018年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行
口座番号 01300-0-93821
加入者名 文学環境学会
(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

<終身会員制度をご活用ください>

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、8名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様をお願いして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局・辻(twain1910★gmail.com)までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

..... 広報より

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光(hiro2827★gmail.com)までお送り下さい。次回の更新は2018年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

..... 編集後記

2018年2月、飛び込んできた石牟礼道子氏の訃報に衝撃を受けた方は多いのではないのでしょうか。石牟礼氏は、文学、そして日本の環境文学を考えるうえで、本当に大きな存在でした。安らかなご永眠をお祈りいたします。

今号では、ASLE-Japan立ち上げ初期の頃から石牟礼氏と交流のある方々が、学会としての記憶としてご報告できたら、と、追悼エッセイを寄せていただきました。また、巻頭エッセイは、未発表原稿や初期の詩から石牟礼氏の想いを掘り起こす進行中の試みについて触れた、刺激的な内容となっています。このほか、和歌山での全国大会の魅力的なプログラムについての案内や、ある場所・風景が時を超えて共有されるカタチについて考えさせてくれる、写真展や森歩きについてのエッセイをお届けします。場所を語ることばがよりふくよかになるよう、これからもみなさんの声をお寄せください。よろしくお願いいたします。

(M・T)

ニューズレター編集委員会では、会員の皆さまからのご寄稿(エッセイ、批評、書評など)、イベント・文献情報を随時募集しています。詳細については各編集委員にお問い合わせ下さい。



【発行】

代表 結城正美
事務局 近畿大学 辻和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江3-4-1
Tel/Fax: 06-6721-2332 (内線3400)
E-mail: twain1910★gmail.com

【編集】

編集代表 札幌大学 豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡3条7丁目3-1
Tel: 011-852-1181 (代表)
Email: toyosato-m★sapporo-u.ac.jp